

かいほ ジャーナル



愛します! 守ります! 日本の海

vol. **88** | 2021 WINTER

[特集]

海図150周年

いままでの150年。
これからの150年。



海上保安庁
JAPAN COAST GUARD



PHOTO GRAVURE

01 全世界の海上保安機関が大集合！

～初めての試み！オンラインでつながった世界の海～

海上保安庁最大級の巡視船「あさづき」が就役

02 米国沿岸警備隊との連携 協力関係の強化の取組

海上保安学校10月採用の215名が入学

03 関西空港海上保安航空基地 救助人数500人突破！

海上保安庁音楽隊 2年ぶりの定期演奏会

海保小説「海の教場」連載中

04 [特集]

海図150周年

いままでの150年。 これからの150年。

10 エトセトラ HL12 測量船「光洋」徹底解説

12 NEWS FLASH

裏表紙

INFORMATION

第22回「未来に残そう青い海・海上保安庁図画コンクール」
「灯台絵画コンテスト2021」



フォトセッションの様子

海上保安庁と日本財団は、11月16日から18日までの間、世界から計98の海上保安機関等（88ヶ国及び10の国際組織）の実務者の参加を得て、「第2回世界海上保安機関実務者会合」を初めてオンラインで開催しました。

会合の冒頭では、海上保安庁勝山総務部長から「本会合を通じて、海の安全を担う世界の海上保安機関同士の連携がさらに深まり、世界の海の安全と平和の実現が図られることを期待している」旨述べました。

会合においては、世界の海上保安に関する先進的な成功事例や経験等を共有し、海上保安に関するグローバルな人材育成、効果的な情報共有手法等について、積極的・活発な議論が行われました。また、複数の初参加国から、「会合に参加でき光栄である」との発言があり、参加国の増加と相俟って『世界会合』という名にふさわしい会合になりつつあることが実感できました。

会合では、3回目となる世界海上保安機関長官級会合（CGGS：Coast Guard Global Summit）（長官級サミット）を令和4年に東京で開催することが決まり、この会合で得られた結果をより高いレベルで確認し、実現していくこととなっています。



全世界の海上保安機関が大集合！
初めての試み！オンラインでつながった世界の海



会合の様子



海上保安庁総務部長挨拶



オンラインの様子



11月12日 引渡式の様子



11月26日 石垣港初入港の様子



初入港を迎える十一管区幹部職員



巡視船「あさづき」

11月12日、海上保安庁で最大級のヘリコプター搭載型巡視船「あさづき」が就役しました。

「あさづき」は「海上保安体制強化に関する方針」に基づき建造された巡視船で、第十一管区海上保安本部石垣海上保安部に配属され、管内唯一の6500トン型巡視船として、尖閣諸島における領海警備のほか、海上犯罪取締り、海難救助等の業務に従事しています。

十一管区への大型巡視船の配備は、令和2年2月の中城海上保安部所属巡視船「みやこ」以来となります。



海上保安庁最大級の巡視船「あさづき」が就役



- 第1回 [2月21日] 外国漁船取締り訓練等 (小笠原諸島沖)
- 第2回 [6月23日] 海中転落者捜索救助訓練 (ハワイ沖)
※ハワイ州カウアイ島沖合で実際の海難が発生したため、日米共同の実働捜索オペレーションに変更
- 第3回 [8月24～25日] 停船措置訓練等 (東シナ海)
- 第4回 [9月23日] 情報伝達訓練 (北太平洋)
- 第5回 [10月3日] 複合型ゴムボート等による挟撃等停船捕捉訓練 (東京湾)



米国沿岸警備隊との連携 協力関係の強化の取組

日米の海上保安機関である海上保安庁及び米国沿岸警備隊は、1948年の海上保安庁創設期より深く交流し、様々な機会を通じて、連携協力関係の強化を図ってきており、令和3年には、米国沿岸警備隊との合同訓練を5回実施しました。

近年、「自由で開かれたインド太平洋」の実現に向け、法の支配に基づく海洋秩序の維持・強化にかかる取組を推進するにあたって中心的な役割を果たす日米双方の海上保安機関の連携・協力がより重要になっています。また、海上保安庁は、米国沿岸警備隊とともに、世界の海上保安機関の連携協力をリードする役割が期待されており、インド太平洋地域の外国海上保安機関に対して海上犯罪の取締り等に必要な能力向上支援にも取り組んでいます。

今後も海上保安庁は、日米海上保安機関合同訓練を通じて、両機関の海上法執行の手法や手続に関する相互理解を深め、互いの能力を向上させるとともに、この実績を積み重ねていく中で、外国海上保安機関への能力向上支援等にも反映させていくこととしています。

11月6日、京都府舞鶴市の海上保安学校において入学式を挙行し、215名の新入生が入学しました。

入学式では、新入生代表の狩俣学生が「海上保安学校学生としての自覚と誇りを持ち、知識技能の習得に励み、心身を鍛え、国民の期待に応えられる海上保安官を目指して努力します。」と力強く宣誓しました。

新入生は、これから来年9月の卒業に向けて先輩・同期と切磋琢磨しながら、勉学や訓練に励みます。



海上保安学校 10月採用の215名が入学



海上保安庁長官訓示(海上保安庁総務部長代読)



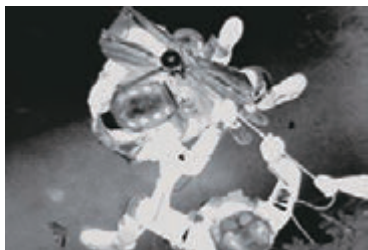
入学式の様子



学生分隊行進



入学生宣誓



500人目 救助吊り上げ



吊り上げ救助の様子



集合写真(2021年9名体制)



夜間訓練の様子



発足当時(2005年4名体制)

8月21日、兵庫県姫路市の無人島、鞍掛島でプレジャーボートが乗り上げ、子供3人を含む7人が孤立。荒天のため巡視艇による救助は難航し、関西空港海上保安航空基地からヘリコプターが出動、強風が吹く夜間に機動救難士3人が降下して全員を吊り上げ救助しました。

これにより2005年4月に同基地に4人の機動救難士が配置されて以降、救助人数が500人を突破しました。救難の現場では、何よりも安全が最優先されます。機動救難士は日々救難能力の向上の研鑽に努めています。



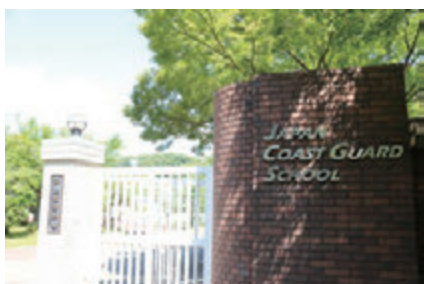
関西空港海上保安航空基地 救助人数500人突破!



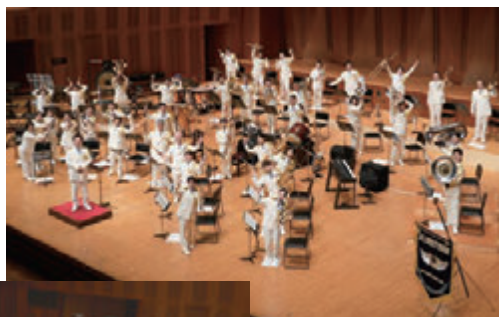
写真中央(右から3番目)が筆者



海保小説「海の教場」連載中



京都府舞鶴市所在の海上保安学校を舞台とした小説「海の教場」が日刊のタブロイド誌で連載中です。海上保安庁初の女性潜水士を主人公にした小説「海蝶」の筆者である吉川英梨が描く、愛と成長と涙の物語となっています。



海上保安庁音楽隊 2年ぶりの定期演奏会



11月4日、海上保安庁音楽隊は、2年ぶりとなる定期演奏会をYouTubeにてライブ配信いたしました。ライブ配信は、海上保安庁音楽隊としては初めての試みであり、無観客での開催ではありませんでしたが、画面を通じて多くの方に見ていただくことができました。視聴者からは「配信ありがとう」、「感動した」、「次は会場で聴きたい」などの温かいコメントが多数寄せられ、大成功に終わりました。ライブ配信の様子はYouTubeにていつでも見ることができますので是非ご覧ください。(https://youtu.be/mc3TsvEL18)

海図150周年記念 日本近海海底地形図

海図150周年

- 凡例
- 領海外縁線
 - 排他的経済水域外縁線
 - 延長大陸棚 ※

海図150周年 いままでの150年。 これからの150年。

日本における海図の歴史は明治4年(1871年)に始まる。柳権悦が海図作製を開始し、翌明治5年(1872年)に、我が国の海図第1号「陸中國釜石港之圖」が刊行された。

150周年の今、改めて海上保安庁海洋情報部と海図の役割を探る。

取材・文／大橋 博之 写真協力／小野 綾子

海洋情報部が果たす役割

「海上保安庁は、海上の安全及び治安の確保を図ることを任務としています。この任務を果たすため、海の中を可視化する海洋調査も大事な役目の1つです」と語るのは海上保安庁海洋情報部企画課の石原健一郎氏。海洋情報部では日本の領海や排他的経済水域、大陸棚等の海洋調査を行う。見えない海のなかの情報を集め、必要とする機関や企業、人々に提供することで海上活動における安全や資源開発等に寄与する。

「海の上は何もなく安全に見えたとしても、その下には急な浅瀬や岩礁があるかもしれません。また日本海はひと冬で水深がかなり変化することがあります。海の情報があることで航海する船にとって適切な判断材料になり、安全な運航に役立てることができます」

船には大小様々な貨物船やタンカー、旅客船、漁船、プレジャーボートなどがある。

東京湾だけでも通航する船は1日約500隻。海の情報はそのらの船はもちろん、船を陸上でコントロールするオペレーター、釣りやレジャーを楽しむ人達にとっても有益な情報となる。

都会に住んでいるとなかなか気づかないが、海に囲まれた日本では、我々が生活するうえで必要な物資の多くは船で送られてくる。船の安全を守ることは人々の暮らしを守ることに繋がる。

そのような海の様々な情報を集めるのが海洋情報部の仕事だ。情報は蓄積するだけでなく必要とするところに随時、提供している。



※ 排他的経済水域及び大陸棚に関する法律第二条第二号の海域を定める政令で指定される海域
データの提供：海上保安庁、国土地理院、海洋研究開発機構、GEBCO、USGS 測量法に基づく国土地理院長承認(使用)R2JH6722

海図150周年を経て未来へ

「海の安全情報の提供で最も大きなものは海図です」

陸上では道路や建物ができるなど変化しても、地図はある程度情報が纏まった段階でメンテナンスが行われている。海も同じように、地形や水深が変わるなどして変化している。海図は、陸の地図とは違い、常にメンテナンスする仕組みが作られている。

日本における海図の歴史は、明治4年（1871年）に始まる。柳橋悦が測量から海図作製を開始。翌明治5年（1872年）には、我が国の海図第1号「陸中國釜石港之圖」を刊行した。それから150年が経過した。

「150年の歴史では、海図作製にはさまざまな変化があったのだろうと思います。事実、私が海洋情報部に入った時と今ではデータの取り方や扱い方は様変わりしました。今後もさらに進化していくでしょう」

古い海図を見て最も驚くのは、その緻密さだという。陸部も繊細に描かれている。海図を見るだけで山の形が分かる。体系的に見えるように工夫されている。しかも、総てが手書きなのは驚愕する。

「パソコンのある現在は、海図作製もラクになりました。けれど先人たちが培ってきた“精神”を我々はどこまで引き継いでいるのか？機械化されても“精神”が抜けてい

ては、意味はないと思います」

大切なのは“精神”を継承したまま、テクノロジーを活用して海を解明し、人々に貢献することだと石原氏は力を込める。

令和2年（2020年）、「海上保安体制強化に関する関係閣僚会議」が開催され、我が国の海洋権益を堅守するための「海洋調査体制の強化」に引き続き取り組むことが確認された。

「従来から活動していた測量船、『昭洋』『拓洋』『明洋』『天洋』『海洋』の5隻に新たに『平洋』と『光洋』が加わり、海洋調査を行っています。また、今まで船だけでは調査が不十分な海域についても、調査に特化した中型航空機の『あおばすく』を整備し、調査体制を充実させ、業務を継続していきます」

これらの測量船等で排他的経済水域などの広大な海域をカバーし、調査を行う。最先端の技術を駆使して、これまで調査が困難であった海域も今後は解明されていくという。

「我々が扱う海洋情報は、船の航行の安全が目的。そこにはしっかりと時代に合った方式で情報を提供していきます。また、研究機関と連携して地殻変動観測も行っています。さらに、『海しる』のよつな形で、皆さんが海に親しみやすいよう、海の情報を提供していきたいと考えています」

未来に向けた活動がスタートしている。

これからの150年に向けて

海洋情報部長 理学博士

加藤 幸弘

海図150年の歴史の重みを、どう受け止めていますでしょうか？

加藤：近代国家として我が国は自立し、発展してきました。その基盤情報として海図は大きく貢献しました。150年というなかで海洋情報部は海運や国防、資源開発など、我が国の経済や他の活動を支える地理空間情報を提供してきました。

海図は明治政府が明治4年に作製したのが起りです。近代国家のスタート時点から海図が重要と認識されてきました。150年経った今でも、日本に入港する船は全て、我が国の作った海図を使っています。150年前の明治政府の認識と今の社会の要請も全く同じ価値だと言えます。その意味でこの150年の歴史は極めて重要でした。今後とも今までの150年と同じように海図は航海安全のため、あるいは海運を支える役割を変わらずに果たしていきます。

しかし、航海の世界は進化しています。紙からデジタルへとシフトする現代のデジタル社会において、海の情報は新たな変身を遂げる機会となると考えています。それが150年の伝統的な役割を追いつつ、我々が150年間集めてきた情報が花開く機会になる。その意味からも海図150周年を記念することはエポックメイキングだと思えます。

節目の150年ではなく、次の150年を目指したターニングポイントだと。

加藤：そうですね。政府は今、デジタル東京というバーチャル空間を作り、東京の都市環境の変化をシミュレーションすることを構想しています。将来のデジタル社会では陸の情報と海の情報が一元化され、溶け込み、様々な

情報が新たな産業、新たなサービスの起爆剤になっていきます。海の情報は今よりさらに広範囲で、より広い分野で、新たな価値を見だしていくでしょう。

メッセージをお願いします。

加藤：地球の海底は、冥王星よりも分かっていません。ペールに覆われていた冥王星はNASAが打ち上げた無人探査機により、徐々に解明されつつあります。それに比べると海はまだ未知の領域。世界中の海図を作る機関が海洋調査をしています。その結果として海の地形、海の姿がどうなっているかを明らかにしようとしています。

ぜひとも、海図で海がどうなっているかを、小学校や中学校の生徒の皆さんにも見ていただきたい。多くの人が海を理解する入り口として、今後も我々は海図や海底地形図を作製し、貢献できればと考えています。



昭和36年の生まれ。愛知県出身。北海道大学卒業。昭和62年海上保安庁水路部（現海洋情報部）に入庁。海洋調査部門を経験した後、海洋調査課長を経て、海洋情報課長に就く。平成28年海上保安庁海洋情報部技術・国際課長を経て、平成30年4月より現職。一貫して海洋調査に関わってきた。

海図がでできるまで

海図製作の基礎となるのが、海洋調査だ。日本周辺海域において測量船や測量用の航空機などを稼働させ、海底地形の調査や潮汐観測を行っている。

そうして得られた情報に各海域、港湾の航路、航法などの安全情報や各地の港湾で実施した測量情報を加え、航海の目標となる岬などの海岸地形、海岸の構造物、灯台などの航路標識の配置なども編集し、海図や水路通報などで必要とする人に正確な情報を伝えている。

現在、推進されているのが、海洋産業の発展、科学的知見の充実のため、各機関に分散している海洋情報を一元的に管理し提供する体制の整備だ。「日本海洋データセンター（JODC）」を最大限に活かす取り組みや、海洋情報部では平成22年（2010年）から「海洋情報クリ

アリングハウス（マリンページ）」、平成24年（2012年）から「海洋台帳」を運用している。さらなる我が国の海洋状況把握の能力強化に向けた取り組みとして平成31年（2019年）より、海洋情報を集約・共有する「海洋状況表示システム（海しる）」の運用を開始。海洋情報の有効活用を図ろうとしている。

海洋調査を担当する森雄基氏、海図編集を担当する栗原恵美氏、水路通報を担当する野田晴樹氏、「海しる」を担当する太齋さゆり氏に、取り組みについて話を聞いた。



海図編集

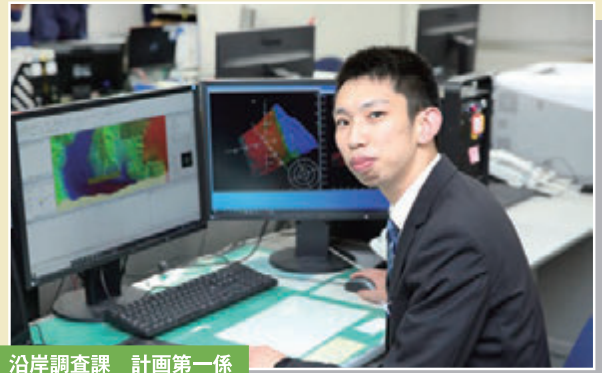


情報利用推進課 図誌計画係長

栗原 恵美

何でも教えていきたい
海図の刊行計画を立てています。どの海図をいつ頃出すのかを地方の部署や測量を担当する部署と調整するのが役割。また、法律の改正による航路の変更などもあり、どのタイミングで情報を出すのかも私の担当です。海図は船を運航するうえで重要なもの。内容に間違いがあつてはいけません。最新の情報である必要があります。そこに細心の注意を払っています。
海上保安庁に入ったのは人の役に立ちたからです。海図は一般の人には馴染みはなく、重要性を分かって頂けないのが悩みです。後輩には私が知っていることは何でも教えていきたいと考えています。

海洋調査



沿岸調査課 計画第一係

森 雄基

より良い海図製作を...
水路測量という、海図を作るための測量業務を行っています。陸上だけでなく測量船にも乗り、調査を行います。船では揺れのため、データが上手く取れないなどの苦労があります。それは陸でデータ処理をしながら気付くことが多く、現場でいかに見落としなく測るかを心がけています。
大学が海洋系だったもので海上保安庁を選びました。海図は人の役に立つものであり、とてもやりがいがあります。日々、測量技術は進歩しています。新しい技術を知れることに面白さがあります。
今後はより良い海図、使いやすい海図の作製に取り組みしていきたいと思っています。



海洋状況表示システム

MDA Situational Indication Linkages



海しる (海洋状況表示システム)

「海しる (海洋状況表示システム)」は、「海の今を知るために」さまざまな海洋情報を集約し、地図上で重ね合わせて表示できる情報サービスです。

衛星情報を含む広域の情報や気象・海象をはじめとするリアルタイムの情報を一元的に活用することができます。



情報利用推進課 海洋空間情報室
主任海洋空間情報官

ださい
太齋 さゆり

私が懸け橋になる

「海しる」の運用を担当しています。各省庁と交渉してデータを集め、分かりやすく表示できるように、システムの調整が主たる業務です。私自身、ITに詳しいわけではないので大変ですが、それよりも多くの人のニーズを聞いて、より良くすることに大変さがあります。民間の情報も掲載して、さらに充実させたい。たくさんの人々に活用して頂けるよう取り組んでいます。

私は水産庁から出向して来ました。水産庁と海上保安庁は海つながりで協力していかなければなりません。私が懸け橋になればと思います。すし、ここでの知識を水産庁でも活かしたいと考えています。

海図のアップデート



情報利用推進課 水路通報室
水路通報官

のだ はるき
野田 晴樹

もっと良い「水路通報」に…

「水路通報」という、海図に伴う最新情報や海上での訓練、海上作業等の情報をお知らせする刊行物を作成しています。

私が「水路通報」に関わるようになって20年になりました。昔は紙だけでしたが、今ではインターネット。効率よく情報発信できるようにになりましたが、さらに分かりやすく情報を提供する。迅速に情報を収集し、素早く発信することに力を入れています。

海の近くに生まれたことから海上保安庁に入ることにしました。「水路通報」は海図利用者は必ず見るもの。とてもやりがいを感じます。今後は、もっと良い「水路通報」にしていくよう、努力したいですね。

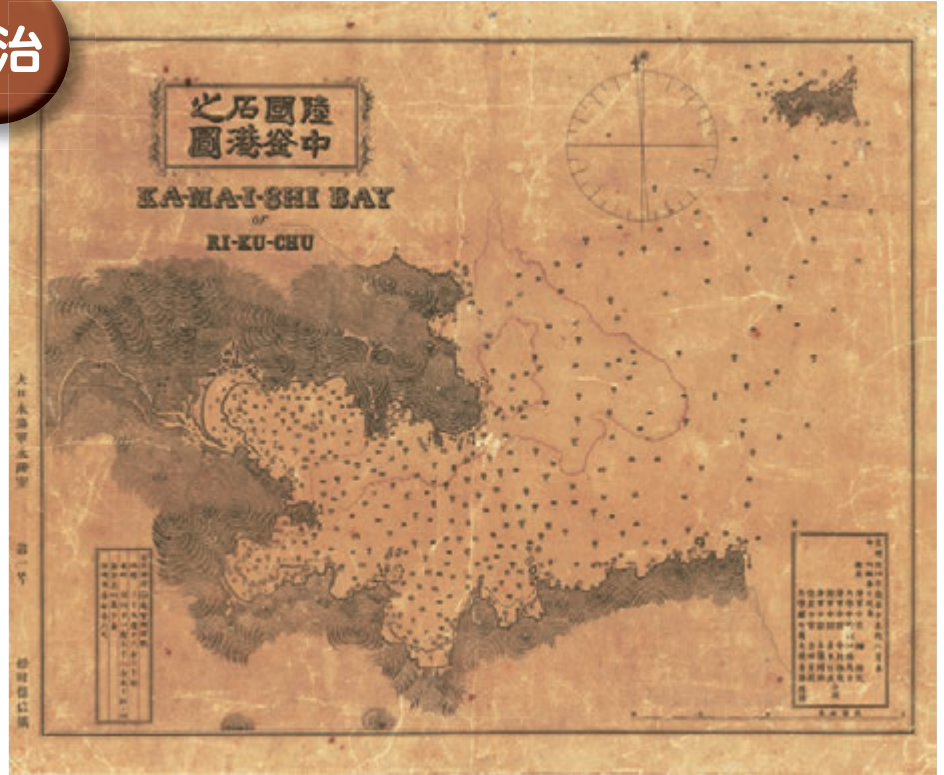
明治



初代水路局長・水路部長 柳橋悦



測量艦「春日」(明治4年～9年)



海図第1号 陸中國釜石港之圖(明治5年)

海洋情報部150年のあゆみ

海図は江戸時代から「海路図」と呼ばれ作製されてきた。しかし、それは島と島の位置関係を示すもので、船の通り道を描いたものにすぎず、水深や岩礁などを測ることはされていなかった。

幕末、開国を迫るために訪れた外国船は、日本の港に入るため独自で水深を測量し、海図を作製していた。そのため明治政府は海運立国を国政の方針とし、国防的見地からも沿岸の測量や海図・書誌の刊行にいたる一連の水路業務を最も緊急の事業とした。

明治4年(1871年)、政府は、ときの兵部省海軍部に初めて水路局を設け、勝海舟とともに海軍伝習所においてオランダ式の航海術・測量術を学んだ津の藩士柳橋悦(やなぎ・ならよし)の海軍少将(将)を起用し、測量から海図作製までを一貫して行う近代的水路業務を開始。翌明治5年(1872年)には、我が国における海図第1号「陸中國釜石港之圖」を刊行したほか、同15年から12か年計画で全国沿岸測量に着手した。

当時はイギリスが測量した成果も採用していたが、柳橋悦は「外国人を雇用せず、自力をもって外国の学問技術を選択利用し、改良進歩をはかるべし」という精神のもと、我が国の近代的な水路業務を推進した。

明治4年に兵部省海軍部に水路局が設置されて以降、時代につれ水路寮、海軍水路局、海軍水路部などの名称の変遷をたどり、昭和20年、第二次世界大戦の終戦とともに水路部は運輸省に移管。

昭和23年、海上の安全や治安の確保に関する行政事務を一元化かつ横断的に実施する機関として海上保安庁が創設されたことにより、水路部は海上保安庁に移管。日本の経済を支える海上交通に必要な海図などを作製してきたほか、港湾造成・漁場開拓・国土開発及び海洋科学などの各分野にその基礎資料を提供してきた。

例えば、潜水調査船「しんかい」の初号機は海上保安庁が保有(昭和44年～52年)し、調査を行っていた。また、昭和59年には測量船「拓洋」が世界最深部(チャレンジャー海淵)を調査し、深さ10,924mを確認している。(その後、国際機関の確認で、10,920mとして扱われている。)

平成14年には「IT技術の進展に伴う情報提供体制の強化」「海洋環境問題への適切な対応」「国際対応能力の強化」を大きな目的として、組織全体の大幅な見直しを行い、明治4年に兵部省海軍部に水路局が設置されて以来使用してきた「水路」という名称を改め、現在の「海上保安庁海洋情報部」となり、令和3年(2021年)で、海洋情報(水路)業務を開始してから150周年を迎えるに至った。

時代の流れとともに進化を遂げてきた「海上保安庁海洋情報部」では、現在、我が国の海洋権益確保、航海安全、防災・海洋環境保全などの様々な目的のために海洋調査、海洋情報の管理・提供を行っているほか、各国との海洋情報業務の連携や技術協力など様々な国際活動を行っている。

■これまでの主な取組み

西 暦	和 暦	概 要
1871年	明治 4 年	明治新政府海洋調査事業を開始 兵部省海軍部に水路局(国の海洋調査機関)を現在の東京都中央区築地に設置
1872年	明治 5 年	品川湾で潮位観測開始(潮位観測のはじめ) 海図第一号「陸中国金石港之圖」刊行(海図刊行のはじめ) 海図頒布開始(海図供給のはじめ)
1873年	明治 6 年	暗礁測定報告発出(航行警報のはじめ)
1879年	明治12年	水路報告を刊行(水路通報のはじめ)
1881年	明治14年	水路測令の制定(測量基準のはじめ)
1893年	明治26年	測量艇の建造(測量専用船のはじめ)
1906年	明治39年	海軍航海年表を刊行(暦表刊行物のはじめ)
1921年	大正10年	国際水路局(現 国際水路機関 IHO)発足、日本加盟
1923年	大正12年	関東大震災により庁舎・測器・資料の焼失 相模湾を中心とする被災海域測量実施
1925年	大正14年	測量艦「満州」にF式測深儀を搭載(音響測深のはじめ) 海流通報を刊行(海洋速報のはじめ)
1929年	昭和 4 年	日本近海水深図を刊行(海底観測のはじめ)
1938年	昭和13年	5隻の用船で海流観測開始(海流観測のはじめ)
1945年	昭和20年	東京大空襲により施設の大半を焼失 運輸省外局として、水路部設置
1948年	昭和23年	海上保安庁創設により海上保安庁水路局となる
1949年	昭和24年	海上保安庁水路部に改編
1965年	昭和40年	海洋資料センター(現 日本海洋データセンター)設置
1983年	昭和58年	大陸棚調査開始(2008年終了)
1984年	昭和59年	測量船「拓洋」世界最深部(チャレンジャー海淵)を調査、深さ10,924mを確認
1995年	平成 7 年	電子海図第一号「東京湾至足摺岬」刊行
1998年	平成10年	海域火山調査開始
2000年	平成12年	海底地殻変動観測開始
2002年	平成14年	海上保安庁水路部から海上保安庁海洋情報部に改編
2003年	平成15年	環境保全調査(海の再生)開始
2008年	平成20年	領海・EEZ調査開始
2011年	平成23年	青海新庁舎へ移転
2016年	平成28年	中央合同庁舎第4号館へ移転(一部施設を残し)

大正



大正時代の築地庁舎



海図作製風景

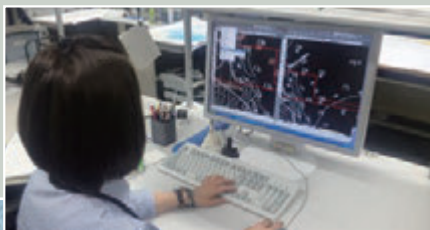


ジグスピー式電動測深機



測量艦「大和」(明治35年～昭和9年)

平成
令和



海図作製風景



海底地殻変動観測(平成12年～)



青海庁舎(平成23年～)



中央合同庁舎第4号館(平成28年～)



海域火山調査(令和2年6月19日)



測量船「光洋」(令和3年～)

昭和



昭和前期の築地庁舎



昭和後期の築地庁舎



海図作製風景



東アジア水路委員会(昭和46年)



潜水調査船「しんかい」(昭和44年～52年)



測量船「拓洋」(昭和58年～)

HL 12 測量船「光洋」

徹底解説

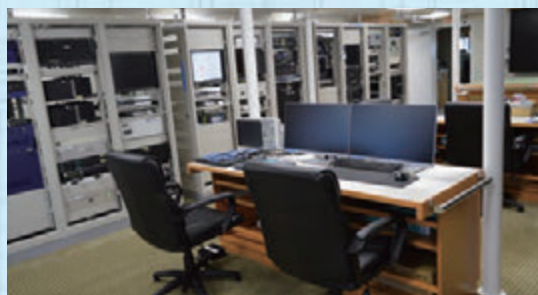


測量船「光洋」は、海上保安体制強化に関する方針(平成28年12月、関係閣僚会議決定)に基づき、海洋調査体制強化の一環として、令和3年(2021年)3月に就役。令和2年(2020年)1月に就役した「平洋」と同様の総トン数4,000トン。海上保安庁最大級の測量船である。主に領海・EEZ調査に専従する。

特徴は、統合電気推進とアジマススラストを装備したことにより、長時間低速航行や定点保持の能力が大きく向上したこと。音波探査の長時間連続観測や採泥調査の位置精度及び作業効率の向上が期待される。

「昭洋」と同様に採泥器、深海用・浅海用音波探査装置、採泥用大型巻揚機を装備しており、精密底質調査を実施することが可能。また、浅海用、中深海用、深海用のマルチビーム測深機を搭載しており、調査海域の水深に合わせた正確な測深を行うことができる。

船名の「光洋」は光輝く海、まだ十分に解明されていない海に光を当て、海洋調査を進め明らかにしていくという想いを込めて命名された。



観測室

測量船の全ての観測機能が集約された部屋。複合測定装置、情報伝送監視装置、各機器制御収録装置などが配置されている。



船橋

高性能化された船橋。観測時の定点保持の際には、位置、方位、動揺、気象データから自動でプロペラ制御が行われる。



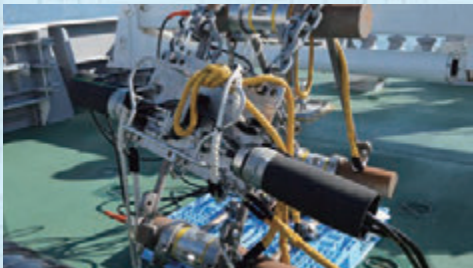
アジマススラスト

舵とプロペラが一体となった360度全周囲に推進力を向けることが可能な推進装置である。



音波探査装置 受振部

ストリーマーカーケーブルと呼ばれる。長さ3000mのケーブルで、マイクを多数内蔵しており、地下深部からの反射波を受振する。



音波探査装置 発震部

エアガンと呼ばれる、大容量かつ超高压の空気を海中で一気に放出する装置。地下深部まで伝わる音波を発する。



採泥用大型巻揚機

大型の油圧式巻揚機。採泥調査の際にはギャロスと併用し、重量のある機器の投入、揚収を行う。



調査のための訓練

次の調査に向けて装置の取り扱いの訓練を行い、スキルを向上させる。



観測準備室(冷蔵庫)
採取した底質試料を低温で保存する場所。



船体主要目	
総トン数	4,000トン
全長	103m
幅	16m
主機	統合電気推進
推進器	アジマス電動推進器

NEWS FLASH

2021.9~11

9月



十管区

本部

ピクトグラム大バズり!!

9/4

四管区

名古屋

巡視艇みやかぜ乗組員による犬の救助



9/10

七管区

三池

海図150周年記念展示用
海図引渡式
(大牟田市石炭産業科学館)



9/14

七管区

大分

大分県議会海上保安議員連盟設立



9/16

二管区

宮城

「灯台活用に係る包括連携協定」
に基づく大須崎灯台イベント



9/17

十一管区

名護

名護海上保安署船艇用品庫
(通称：名護防災ステーション) 運用開始!



9/21

十管区

鹿児島

噴煙を上げる諏訪瀬島と巡視船あかいし



9/21

一管区

網走

海上保安庁航空機による吊上げ救助訓練

9/24

十管区

熊本

天草ほんど花火大会、海上で警戒



10月

10/3

二管区

宮城



「第40回豊かな海づくり大会」2年越しの宮城県開催！

10/4

一管区

釧路航空基地

地元小学生が航空基地・機体を見学



10/9

四管区

四日市

巡視艇あおたきによる市内中学生の体験航海



10/17

六管区

広島航空基地

ひろしま空の日2021 ふれあい秋まつり（オンライン）へ紹介動画で参加！



10/30 ~ 11/12

大管区

海上保安大学校初任科乗船実習



11月

11/2・4・5

三管区

本部

潜水研修候補者選考会を実施



11/4

七管区

三池

こちら有明海沿岸救助隊！ 漕スキー救助訓練！



11/5

一管区

本部

函館つがる、海賊対策のためフィリピン周辺海域へ向け函館港出港



七管区

唐津

津波フラッグ掲出等訓練



11/20

二管区

本部・仙台基地

第22回「未来に残そう青い海 海上保安庁図画コンクール」表彰式



INFORMATION

第22回 未来に残そう青い海・海上保安庁図画コンクール

～ 受賞作品が決定しました ～



小学生高学年の部
ほりいけ ゆずは
堀池 柚羽さん 広島県 広島市立皆実小学校 4年生



小学生低学年の部
ふたませ ゆうと
二間瀬 悠斗さん
鹿児島県 奄美市立知根小学校 2年生



小学生高学年の部
たに ゆうしろう
谷友視朗さん
沖縄県 宮古島市立平良第一小学校 4年生



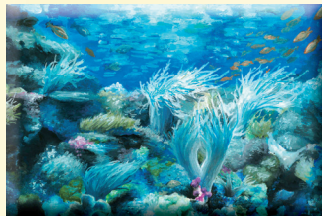
小学生低学年の部
あおき ゆうま
青木 勇麻さん
徳島県 徳島市国府小学校 3年生



小学生高学年の部
ふるた ゆうせい
古田 侑勢さん
福岡県 福岡市立香椎小学校 5年生



中学生の部
やぎ かれん
八木 香練さん
福島県 福島県立ふたば未来学園中学校 3年生



中学生の部
ごとう はな
後藤 羽菜さん
茨城県 常陸太田市立金砂郷中学校 2年生

灯台絵画コンテスト2021

～ 入賞作品が決定しました ～



題名「みんなで行ったたねがしまとうだい」
やまぐち ゆうな
山口 優那さん
鹿児島県 中種子町立油久小学校 3年生



題名「大空に世界の平和を願う灯台」
やべ
矢部 あめりさん
東京都 東大和市立第一小学校 6年生



題名「雲の灯台」
よしはら りょうたろう
吉原 諒汰朗さん
鹿児島県 始良市立帖佐中学校 3年生